

デジタルハリウッド大学の研究紀要『DHU JOURNAL Vol.09 2022』をお届けする。この研究紀要は、デジタルコンテンツ領域を中心としたさまざまな学術的課題に対して、理論と実務を架橋する高度な研究活動の発表の場として発刊され、9年目となる。

ありがたいことに、この研究紀要を読んだ感想をあちこちで聞くようになった。研究紀要であるがゆえ玉石混交で、素晴らしいものばかりでないのはわかっているが、本学の実情を感じられる媒体としてお役に立てているのではないかと思う。また、この研究紀要での成果が、博士の学位の取得に貢献しているという報告もいくつかいただき、嬉しい限りである。

今回も、予め編集方針として、これまでの研究教育活動の成果をまとめた「これまでのまとめ」と、他では受け入れられにくいような先端的で萌芽的なテーマを論考した「未来への挑戦」とをふたつのテーマとして掲げ、投稿を募った。本学の教員、職員、大学院を修了した研究員、現役の大学院生らから、バランス良く投稿があった。

編集幹事も4回目となり、欲がでてくる。学内のさまざまな活動を眺めていると、あれもこれも投稿してほしいとなり、いろいろお声がけさせていただいた。一方、あちこちで、この世情から、困難な状況や停滞が起きていることが伝わってくる。うまく進まず、成果がまとまらない案件も多い。そのせいか、今回は、査読の過程での不採録判定も多く、残念ながら種別が論文の採録はひとつも出すことができなかった。長く続けていると浮き沈みもあるということで、ご容赦いただきたい。

その代わりと言ってはいけませんが、特別寄稿として、このタイミングで本学の歴史を振り返る論考を書いていただいたので、楽しんで欲しい。また、今回は、本学のメディアサイエンス研究所所属の教員からの報告をたくさん集めることができたので、研究教育活動の成果をまとめることの習慣化が進んでいる証拠となるだろう。株式会社立である本学の特色のひとつである教員と職員の協働に関わる報告についても、引き続き注目して欲しい。

この研究紀要が発刊されるタイミングで、研究紀要論文発表会というイベントを開催する。研究発表に不慣れな学生や職員と、老練な教員たちが混ざって、渾然一体となるようなことを目指している。また、大学院の授業「アカデミックライティング」では、引き続き論文の書き方を教えている。研究技法に関する専門科目も充実を図っているところであるので期待して欲しい。

繰り返しになるが、これをご覧の方々には、本学関係者として、あるいは共同研究者や協力支援者として、次号への投稿を検討していただきたい。

いまから世界を幸せにするひとをここで待っている。

編集幹事 Chief Editor

木原 民雄 KIHARA Tamio

デジタルハリウッド大学 教授 大学院 研究科長
Digital Hollywood University, Professor, Dean of the Graduate School